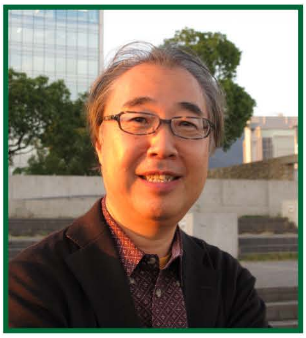
みんなで備える
コミュニティ防災 vol.12

地域のつながりと防災



中川　真
大阪市立大学大学院
文学研究科教授

祭りの力

東日本大震災の津波被害によって大きな打撃を受けた、岩手県の陸中沿岸の村のコミュニティ復興のお手伝いをした私は、芸能や祭りといった伝統的な文化のもっている力に目を見張りました。被災して、避難所や仮設住宅にバラバラになった人々を再結集させ、束ねたのは祭りでした。多勢亡くなったときに、祭りなんて不謹慎だと思った人々もいましたが、いざやってみると、祭り囃子のメロディのなかで悲しさと懐かしさが混じり合い、人々は手を取り合って涙を流したのです。そこから復興の第一歩が始まりました。

ソフトのインフラ

コミュニティの復興にはハードとソフトの両面が必要です。ハードは道路や住居、病院や役所といった目に見える生活インフラです。ソフトのインフラとは人々の良好な関係のことです。気持ちよく協力し合ってこそ、同じ方向に動き始めます。つまり精神的な絆です。祭りはそういった絆をつくりあげます。逆に、震災以前から祭りが盛んでなかった地域では復興が遅れたということを聞きます。地域の絆がコミュニティの危機を救うのです。

コミュニティ劇団の結成

関西地方にも、そう遠くない将来に大きな津波被害が及ぶことが想定されています。それに対して、ソフト面でどのような準備をしておけばよいのでしょうか？　私は勤務する大学の足元（住吉区）で一つの試みを進めています。そこには目立った祭りなどはありません。何か地域の人々が集まれる仕掛けはないだろうかと考え、劇団をつくろうと思い立ちました。コミュニティに異変があったときの、コミュニケーションの核を作れないだろうか、と。

地域防災のために

それが三年前です。地域にチラシを配って、最初の説明会に集まったのはたった二名。しかし、年に一回の公演を重ねるごとにメンバーが増え、いまでは六歳から七〇歳までの約二〇名が集まる劇団へと成長しました。台本は自分たちで作り、内容は防災にこだわりません。演劇の準備には共同作業が欠かせず、全ての過程が相互信頼を育むための重要なステップとなります。知らなかった人々が出会って、新たな小さなコミュニティができあがりました。万が一、災害に遭ったときには、地域を束ねるために大きな力を発揮してくれるのではないかと期待しているのです。